

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 2 年 7 月 1 日現在

機関番号：34310

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K04116

研究課題名(和文)「社会派ドキュメンタリー」制作過程の研究

研究課題名(英文) Research on the Production Process of Social Documentaries

研究代表者

小黑 純 (OGURO, JUN)

同志社大学・社会学部・教授

研究者番号：00388167

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、テレビの社会派ドキュメンタリーを手がけた実力派の制作者16人(15組)に対して、長時間の聞き取り調査を行い、証言記録(オーラルヒストリー)を作り上げた。作品のテーマは、戦争、原発事故、米軍基地問題、司法と冤罪、公害、家族、教育、メディアと権力など、多岐にわたる。硬いテーマをどう視聴者にわかりやすく届けるか。制作者がいかなる困難を乗り越え、個々のテーマをテレビ番組のドキュメンタリー作品として結実させたのか。テレビ制作の現場で活躍するプロたちが語った詳細な証言記録から、ドキュメンタリー制作の<実践知>を読み取ることができる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

テレビの社会派ドキュメンタリーの実力派の制作者から、長時間の聞き取りを行い、最重要部分を凝縮させて、証言記録(オーラルヒストリー)という形にまとめ上げた。語りを重視し、できるだけ発言した通りに記録してこそ真のオーラルヒストリーになり得るという立場を貫いた。専門用語には註を付けて補足した。それにより、制作者がいかにテーマを見つけ、取材し、作品に仕上げたかという<実践知>だけでなく、制作者の熱い思いや強烈な個性まで、読み手に伝わる。証言記録は丸ごと、隣接研究の「史料」と位置付けられ、ジャーナリズム研究の発展に寄与すると同時に、制作現場の人たちが参考にすべきモデルケースとなる。

研究成果の概要(英文)：In this study, we conducted a lengthy interview survey of 16 influential TV social documentaries to create a record of their testimonies (oral history). His works cover a wide range of topics, including war, nuclear accidents, atomic bombs, justice and false charges, Minamata disease, the issue of U.S. bases in Okinawa, families, education, media and power. How to deliver hard themes to viewers in an easy-to-understand manner? What difficulties did the producers overcome to turn individual themes into documentaries for television programs? You can read the <practical knowledge> of documentary production from the detailed testimonies of professionals working in TV production.

研究分野：ジャーナリズム

キーワード：社会派ドキュメンタリー ドキュメンタリー制作 テレビ オーラルヒストリー

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

テレビ局の「社会派ドキュメンタリー」は、医療や教育、労働など、見えにくい深刻な社会問題を掘り起こして、問題を提起するという重要な社会的使命を担っている。ジャーナリズム研究の分野では、テレビ局が制作したドキュメンタリー作品自体の内容分析は行われてきた。だが、送り手の研究、すなわち制作者および制作現場を対象とした研究は、まだ黎明期にあった。

「新聞の読者離れ」に象徴されるように、新聞やテレビなど、昨今のニュース・メディアを取り巻く環境は厳しさを増している。しかし、社会の森羅万象を切り取るニュースの必要性は変わっていない。中でもテレビ局が制作する「社会派ドキュメンタリー」は、社会が複雑化すればするほど、その重要性を増していると考えられる。1本の作品を完成させるには、膨大な取材と編集作業が必要となるが、作品自体の伝える力は極めて大きい。権力の不正をあぶり出す調査報道と同様に、映像ジャーナリズムとして、極めて重要な役割を担っている。

例えば、2014年に放送されたNHKスペシャル「調査報告 女性たちの貧困」は、家賃が支払えず東京・新宿のネットカフェで暮らす母娘の姿を追い、視聴者に衝撃を与えた。働く世代の単身女性の3分の1が年収110万円以下の暮らしを強いられている背景に、親の世代の貧困が若年女性へと連鎖している実態があることを伝えた。一方、取材チームの態勢や予算はNHKに比べ劣る民放も、優れた「社会派ドキュメンタリー」を次々と発表している。一見豊かで平和な社会で、様々な不条理な事態が市民の間で起こっている。戦争、原発事故、公害、自然災害、差別や偏見、冤罪など、社会の不条理をドキュメンタリーは、地道に追ってきた。それに挑む制作者たちがいる。水面下の社会的問題を可視化する、「社会派ドキュメンタリー」の社会的意義は大きい。

このような視点から先行研究を確認していった。本研究がなぜ研究対象をテレビの「社会派ドキュメンタリー」とするのか。ひと言で言えば、ジャーナリズム研究として重要な研究対象であるのにもかかわらず、ほとんど行われていなかったからである。「社会派ドキュメンタリー」がどのように作られたのかは、ブラックボックスになっている。このままでは、制作者が培った<実践知>が後世に引き継がれない恐れがある。

国内のジャーナリズム研究においては、媒体別にみると、伝統的な新聞の研究が依然として多く、そもそも映像の研究が少ない。テレビのニュース速報に関する研究はある。しかし、新聞・雑誌の調査報道に相当する、社会派ドキュメンタリーの研究は非常に限られている。

それに加えて、テレビ番組などの映像作品を研究対象とする研究は、作品の内容を量的に分析し、知見を見出すものが中心で、制作者に関する研究がほとんどなされていない。著名な制作者に関してもフィルムグラフィ(作品歴)すら整備されていないのが現状だった。

その必要性から、NHK放送文化研究所(NHK放文研)は2012年から、テレビ番組全般について「制作者研究」を始めた。しかし、この研究は、いわゆる作家研究のように、1人の制作者がどのような作品を作ってきたかを総花的にまとめた形式になっており、1つの作品に焦点を当てたものではなかった。しかも、分野としても「社会派ドキュメンタリー」の関係者については、草創期にとどまっていた。これに対して本研究は、社会的に一定の評価を受けた「社会派ドキュメンタリー」がいかに作られたかを、掘り下げられるところまで掘り下げるところに特徴があると言える。

### 2. 研究の目的

本研究は、テレビの「社会派ドキュメンタリー」の制作過程を解明することを目的とし、国内の主要なコンクールで賞を受賞した作品とその制作者を研究対象として進められた。具体的には、(1)作品ごとに中心的な制作者の証言を聞き取り、記録(オーラルヒストリー)をつくる、(2)各作品の比較研究を行い、制作者の動機や関心、技法などの<実践知>を整理、体系化する、という柱を設けた。

### 3. 研究の方法

本研究が対象とする作品は、過去5年間で主要なコンクールで優秀作として選ばれた作品の中から抽出した。複数の研究協力者を加えて検討会を開き、約30本の作品を選定する。当初は、聞き取り調査を承諾した10~12本に絞り込むことにしていたが、より多くの証言を得るため、最終的には聞き取りを行う制作者として16人(15組)を選定した。

制作者に対する聞き取りは、研究代表者と、複数の研究協力者が検討会を開き、意見交換し、より有益な聞き取り調査となるように精査した。実際の聞き取り調査は、原則として研究代表者と、研究協力者2人の計3人が行った。1回当たりの聞き取りは、平均4~5時間で、必要に応じて複数回行った。聞き取り調査は地理的には、メディアが集まる東京に限らず、北海道から沖縄まで、全国を網羅した形となった。

最後はオーラルヒストリー化である。大きな流れとしては、最初の文字起こし作業(トランスクリプション)は外注で行う[第1次速記録]。それに続く作業は主に、研究代表者と、研究協力者が分担して行った。第1次速記録を土台に、作品に関連する史実との照らし合わせや、固有名詞の確認などを行った上で、読みやすいように、編集した[第2次速記録]。次に、インタビューに速記録の校正を依頼した[第3次速記録]。最後にもう一度校正し、証言記録として完成させた[オーラルヒストリー化]。

こうしたプロセスには、次のような考え方を採用した。すなわち、オーラルヒストリーにおい

ては、「極力、発言した通りにテキスト化し、その証言そのものを後世に伝えていく」ということが重視されている。一方、新聞や雑誌のインタビュー記事においては、言い直しなどを含め、大幅に書き換えてしまうこともしばしば行われている。本研究においては、できるだけ発言した通りに記録する、それでこそオーラルヒストリーである、という考え方に基づいて進めた。最小限の注釈を付ければ、証言のままでも理解できる形を目指し、研究班として何段階かの細かいプロセスを踏んだ。

上記の第2次速記録においては、次のような内部ガイドラインに基づき、第1次速記録を「圧縮」し、1人当たり2万字前後にまで凝縮していった。

質問は極力短くする

質問に対するご発言・ご証言については、言い直しや繰り返しなどは削除する

編集者が勝手に別の言葉に言い換えることはしない

言葉が足りない部分は、( )で最小限補う

複数の作品について語られた場合は、代表作に絞る

発言の順番を入れ替えることは可(読みやすくするため)

こうした内部ガイドラインに基づき、できる限り証言のままでも理解できる形になるように、心がけた。

#### 4. 研究成果

テレビの社会派ドキュメンタリーの実力派の制作者から、長時間の聞き取りを行い、最重要部分を凝縮させて、証言記録(オーラルヒストリー)という形にまとめ上げた。語りを重視し、できるだけ発言した通りに記録してこそ真のオーラルヒストリーになり得るという立場を貫いた。専門用語には註を付けて補足した。それにより、制作者がいかにテーマを見つけ、取材し、作品に仕上げていったかという<実践知>だけでなく、制作者の熱い思いや強烈な個性まで、読み手に伝わる。証言記録は丸ごと、隣接研究の「史料」と位置付けられ、ジャーナリズム研究の発展に寄与すると同時に、制作現場の人たちが参考にすべきモデルケースとなる。

結論の一端を紹介して、結びに代えたい。

一つは、特に民間放送の制作者の場合、ローカルニュースで取材を重ね、その集大成としてドキュメンタリーをまとめているケースが多いことである。このことは、多くの作品が、日常のルーティンワークの地道な仕事の上に成立していることを示している。その結果、同じテーマで何度も同じ対象者、同じ現場を取材することが容易になり、一つの問題を長期にわたってウオッチし続けることを可能にした。その積み重ねが結果として、社会派ドキュメンタリーが成立していることが明らかになった。

もう一つは、さまざまな番組コンクールでの受賞が、制作者の大きな励みになっている事実である。受賞することで社内の環境が整い、今後も継続してもよいというお墨付きを得て、さらに同じテーマを追ったり、また別のテーマに挑んだりしている例が見られた。受賞が何者にも代え難い、社会派ドキュメンタリー制作の援軍となっていると言える。

それだけに、制作者の1人が次のように証言したことは、ドキュメンタリー制作の現場においては非常に重たい問題提起となる。すなわち、「番組コンクールでは、視聴者が共感できない人物を主人公にすると落とされてしまう。このことがテレビのドキュメンタリーをやせ細らせている原因の一つになっている」という指摘である。

社会派ドキュメンタリーの制作者たちがどこへ向かうのか、本研究がさらなる発展の一助となれば幸いである。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 西村秀樹
2. 発表標題 社会派TVドキュメンタリーの成立過程の研究 - 沖縄返還密約をめぐる『メディアの敗北』の研究
3. 学会等名 日本オーラル・ヒストリー学会 第16回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 小黒純・西村秀樹
2. 発表標題 テレビの社会派ドキュメンタリーの成立過程の研究 - 南海放送「X年後」伊東英朗ディレクターへの聞き書きを中心に
3. 学会等名 日本オーラル・ヒストリー学会 第15回大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 西村秀樹・小黒純
2. 発表標題 社会派TVドキュメンタリーの成立過程の研究 - 戦争の加害と被害をめぐる『記憶の澱』の研究
3. 学会等名 日本オーラル・ヒストリー学会 第17回大会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 小黒純・西村秀樹・辻一郎	4. 発行年 2020年
2. 出版社 藤原書店	5. 総ページ数 450
3. 書名 社会派テレビ・ドキュメンタリーをつくる（仮題）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	西村 秀樹  (Nishimura Hideki)	同志社大学・嘱託講師	
研究協力者	辻 一郎  (Tsuji Ichiro)	大手前大学・評議員	